シュタイナー幼稚園の創設者 E.M.グルネリウスの理論と実践に関する研究

（要旨）

広 島 大 学 大 学 院 文 学 研 究 科

博 士 課 程 後 期 人 文 学 専 攻

学籍番号：Ｄ１８３３４６

氏　　名：杉 岡　幸 代

本論文は、世界的な広がりをもつシュタイナー幼稚園について、その構想者である R.シュタイナー（Rudolf Steiner：1861-1925 ）と、彼の依頼を受け、初めて実践に当たった E.M.グルネリウス（Elisabeth Marie Adelheid von Grunelius：1895-1989 ）との理論・実践上の整合性の有無を明らかにするとともに、シュタイナー幼児教育の本質を明らかにすることを目的とする。

グルネリウスは、シュタイナーに師事し、その実践の基本原理をシュタイナーの教育論に負う。しかし、シュタイナーに出会う前に学んだフレーベル精神に基づく幼稚園教師養成のためのコメニウスゼミナールでの学びや、シュタイナーに出会った後にも、ペスタロッチ=フレーベル・ハウスでさらなる学びを進めている。それゆえ、そこでの実習体験や学びが直接あるいは間接に、後のシュタイナー幼稚園の実践に反映されている可能性があり、その点を考察していく必要がある。しかし、その点を含め、理論の創設者であるシュタイナーと実践家であるグルネリウスとの理論・実践関係を学術的に解明した研究は国内外において今日まで存在しない。それゆえ本研究では、未だ解明されていないシュタイナー理論とグルネリウスの実践との関係性について、とりわけグルネリウスの実践が確立するまでの経緯に焦点を当てて考究する。それゆえ、本研究の意義は、両者の連結点を解明することで、シュタイナー幼児教育の本質と全体像を捉え直すことに寄与できることにあるといえる。

本論文は、文献研究法を主とし、第一部の「シュタイナーの人間観・発達観と幼児教育論」と第二部の「グルネリウスの思想形成と幼児教育実践」との二部によって構成される。第一部においては、比較項となるシュタイナー自身の人間観・発達観と幼児教育論の特徴についてシュタイナーによる著書を中心に整理する。第二部では、文献研究並びに現地での関係者への聞き取り調査を通して、グルネリウスが幼児教育実践に至る背景を解明し、その後に展開するシュタイナー幼児教育の理論と実践の特徴を浮き彫りにする。

まず、第一部第一章では、シュタイナーの人間観をまとめた。

シュタイナーの教育論は、独自の人智学的人間観を基底に置く。その人間観は、大きく肉体・心・精神の三領域で構成される。シュタイナーは、これら三つの領域とそれらに働きかける力である形成力体（Leib）を基盤に、独自の人智学的な概念でもって人間の構造と発達を語ることになる。具体的には、まず幼児期には肉体、次に児童期には心の基盤形成がなされ、最終的に青年期以降に高次の思考作用である精神が働き始めることで、各々の発達はホリスティックで十全なものとなる、とされる。

次に、第一部第二章では、シュタイナーの発達観を整理した。

シュタイナーは、人間の発達は誕生から約七年ごとに変容の節目を迎えると考える。人間本質には四つの構成要素（物質体・エーテル体・アストラル体・

自我体）があり、これら四要素は、各発達段階の節目に活性化し始め、心身の発達に関わっていく。シュタイナーの発達区分に基づき、誕生から歯牙交代頃までの第１・七年期、歯牙交代頃から思春期までの第２・七年期、思春期から成人までの第３・七年期について考察し、それぞれ先に挙げた四つの構成要素と発達課題との関連をふまえシュタイナーの発達論を構造化した。

続く第一部第三章では、シュタイナーの幼児教育論について考察した。

シュタイナーが主張する幼児教育の中心課題は、「正しい肉体の形成」であり、その方法論的な原理は、「模倣」と「模範」となる。それゆえ本章では、まず、幼児期の教育がその後に続く心・精神の成長の基盤となっている論理的背景を示し、次に、幼児期の正しい肉体形成の方法である「模倣」と「模範」の理論原理と実際の教育方法について解説した。シュタイナー教育の場合、幼児期における正しい肉体形成が、人間形成の土台となり、それが、続く児童期の感情（共感・反感）形成、青年期の思考育成、さらには高次の精神を実現する力となる意志の形成へと影響を与え、展開していくものとして構想されている。

第二部では、グルネリウスの幼児教育理論と実践について考究した。

まず、第二部第一章では、グルネリウスの思想形成に迫るため彼女の生涯についてまとめた。その過程で注目されたのは、彼女の家族環境である。貴族の称号を与えられ経済的にも豊かである父とその夫を支え幼稚園を設立した母は、ともに神智学に傾倒していた。そのため両親は、わが子の個人授業をその学派の系譜を汲む人智学の徒である家庭教師に委ねた（シュタイナーは初めドイツ神智学協会事務局長を務め、後にそこを脱し独自の人智学を創始）。この神智学・人智学との縁によって、グルネリウスは後にシュタイナーと出会うことになる。この出会いを通して、シュタイナーはグルネリウスの人柄を高く評価し、彼女に自らが構想する幼児教育を託したいと強く希望し、グルネリウスもその思いを受け止め、シュタイナー幼稚園の最初の教師となるのである。

次の第二部第二章では、幼稚園教師になるためのグルネリウスの学びについて、その経緯と全体像を解明した。グルネリウスは、幼稚園教師になるために、大きく三つの方向で学びを深めていった。一つはシュタイナーからの直接教授であり、そのほかには、コメニウスゼミナールへの参加と修了（幼稚園教師試験合格）と、ペスタロッチ=フレーベル・ハウスでの教育実習と理論学習である。本章では、とりわけグルネリウスのその後の理論・実践形成に影響を与えたことが予想されるコメニウスゼミナールとペスタロッチ=フレーベル・ハウスの学びについてまとめた。特に後者での学びについて、筆者はドイツの当施設を訪ねた際に提供されたグルネリウスの学籍記録や当時のペスタロッチ=フレーベル・ハウスの様子を伝える資料を中心に実習内容を把握していっ

た。こうした研究は、管見の限り世界において存在せず、本考察は国際的なグルネリウス研究で嚆矢と思われる。

続く第二部第三章では、グルネリウスによるシュタイナー幼児教育の理論と実践について考察を進めた。グルネリウスが導く、シュタイナー幼稚園の発展区分を次のように定め、区分ごとに関連する理論と実践を整理した。まず、「シュタイナー幼稚園創設前の仮説幼稚園期」、次にそれに続く「最初のシュタイナー幼稚園創設期」、さらにアメリカで実践を展開する「アメリカでの実践期」、そして最後に「ヨーロッパ帰還後」という発展区分において、それぞれの時期の実践と理論の特徴を描出した。なかでも、「ヨーロッパ帰還後」のグルネリウスのいくつかの著作は邦訳されておらず、これらの解明は、グルネリウスによる実践の全体像や、その後のシュタイナー幼稚園の発展を知るうえで先駆的な研究となり得たものといえる。特にグルネリウスが 1971 年に著したシュタイナー幼児教育理解のための本、*Das Wesen des kleinen Kindes*（幼児の本質）は、グルネリウス自身によってシュタイナー理論で重要と考える部分が抜粋されているため、グルネリウスによるシュタイナー幼児教育理解を知る上で大いに参考となるものである。

最後に結論では、グルネリウスによる幼児教育実践と、原理とされるシュタイナー論との整合性の有無に焦点を当て考察を進めた。これに関して、両者の分断を説く二つの立場、つまり、グルネリウスの実践はフレーベル教育学によって基礎付けられているとするブフカ（2019）や、シュタイナー幼稚園の原型は、ペスタロッチからフレーベルに受け継がれた「家庭」教育にあるとする馬場（2018）の見方が存在する。しかし、両者は、当時のペスタロッチ＝フレーベル・ハウスやシュタイナーの思想理解（創設者のシュラーダーがシュタイナーや神智学の影響を受けていたことや、グルネリウスを指導したドレーシェルが神智学とも関わるモンテッソーリ教育に関心をもっていたことや、シュタイナーの家庭を重視する視点）に及んでいない。シュタイナーからは、直接的な「家庭」という表現は聞かれないもののどのような大人が子どもの周囲にいるかは大きく子どもの発達に影響を与えるという点で、温かい愛情深い大人の存在を重視していた（シュタイナー：1907, S. 29）ことは明らかである。

グルネリウスは、ペスタロッチ=フレーベル・ハウスでの学びを終え、最もその教育思想に信頼を寄せるシュタイナー自身の依頼を受け、シュタイナー理論に基づく幼児教育実践を展開していった。具体的にそれは、7 歳までの子どもが自身の感覚器官を通して正しい肉体の形成を成すために、愛情深く受容的態度をもった大人の存在と、模倣できる大人の仕事を幼稚園に導入することであった。つまり、子どもが日常生活を模倣することができる幼稚園は、常に母

親のいる温かい理想的な家庭の雰囲気をもたねばならないと考えられたのであった。

晩年にグルネリウスが編集したテキスト（1971）には、彼女自身がシュタイナー幼児教育論の核と捉えた部分や、肉体の正しい形成に関わる重要な概念と考えた箇所にアンダーラインが付されている。特に幼稚園の活動について、彼女が重要とみなしていたのは次のことであった。

シュタイナー教育において、幼児は感覚・身体的な存在であり、そこでは模倣の原理が有効視される。それゆえ、幼稚園で子どものそばにいる教師の振る舞いや家庭や周囲にいる大人たちの態度が、模倣の対象として最も重要となる。一個の全身感覚器官として環境を吸収するように受容していた幼児が、自らが生み出す想像力によって生きることへ移行するプロセスが大切となる。

以上のことから、グルネリウスの理論と実践は、直接に、シュタイナー幼児教育論との整合性を有するものと判断され、根源原理として、ペスタロッチやフレーベルの理論・実践に基礎づくものとはいえない、と結論づけた。